
霊幻彼氏

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊幻彼氏

【Nコード】

N8925Z

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

クリスマスイブに恵理が電話で呼び出した元カレ、孝之。イケてる外見に合わず頑固で一途だった孝之を10年前に捨てたのは自分だった。

イブの夜に孝之と再会し夜を共にした恵理は、別れた事を後悔するが、時既に遅し。

孝之は3年前に死んでいたのだった。

前に書きました短編『クリスマス・イブ』の続編です。

1（前書き）

季節限定で書きました短編『クリスマス・プレゼント』の続編です。
宜しければ、そちらもご覧下さいませ。

「いらつしゃいませ〜！恋人にチョコレートはいかがですか〜！？」

時は寒さ本番の1月末。

地元の百貨店の入り口で、あたしは寒さに震えながらワゴンに入ったチョコレートを売りつけようと、声を枯らしていた。

たった2ヶ月前まで大阪で出版社に勤務していたあたしが、何故、田舎の百貨店でバレンタイン商戦のアルバイトをしているのか。

答えは簡単。

会社が倒産したからだ。

結局、あたしは仕事が失業した今、大阪で一人暮らしをしている理由がなくなつて、実家に帰ってきてしまったのだ。

失業保険が出ている間は、定職に就く訳にはいかないので、こうやってスポット的なアルバイトを職安で斡旋してもらっては日当を稼いでいる毎日だった。

今までの貯金があるのと、実家にいるのとで、差し迫って生活費に困るわけではないが、35歳の独身女性がいつまでもこの状況ではマズイと自覚はしていた。

だからと言って、この年になっていきなり正社員の仕事は見つかる筈もない。

今の所は就職活動をしながらか遊んでいるよりはマシなこのアルバイトを2月14日まで入れてしまったのだった。

「松本さん、メチャクチャ寒いですね〜！あたし、もう凍え死ぬかも〜」

一緒にバイトに入っている女子大生の鈴木裕香ちゃんすずきゆつかがガタガタ震

えながら、手を擦り合わせて泣き声を上げた。

「頑張るのよ！今日は6時まででいいって、チーフも言ってたし」

「えゝ、まだ3時なのですかゝ？まだ3時間もここにいろって事ゝゝゝつか、バレンタインまでまだ2週間もあるのに、売れるわけないですよゝ」

「売れないと思うけど、他の店が売り始めてる以上、やらない訳にはいかないんでしょ。そのお陰で雇ってもらってるんだから、文句言えないじゃない」

「そりゃゝそゝですけどゝゝゝ外でやる必要は全くないですよねゝゝ」

それにはあたしも同感だった。

ただでさえ風の強い海沿いのこの街で、真冬に外でチョコレートを売るなんて狂気の沙汰だ。

激安家電店にいるネット回線会社のキャッチ部隊のような、ペラペラのウィンドブレーカーが制服として配給されているが、この強風の中ではあまり意味をなしていない。

道行く客も、ワゴンの中をチラリと一瞥するだけで、さつさと歩き去っていく。

何時間もここに立っているのに、あたしから買ってくれた男性はまだ一人しかいなかった。

思い出すのも困難な冴えない風貌の中年男だったが、あたしがあまりにしつこく押し付けたものだから、同情で買ってくれたようなものだ。

あたし達は、あたかも『マッチ売りの少女』のように、「チョコはいりませんかゝ」とか細い声で叫び続けた。

長い間、一人暮らしたったあたしが、この街に戻ってきたのには、

ちょっとした理由があった。

収入が無くなって生活できなくなったのは勿論なのだが、クリスマスに起こった不思議な体験が、あたしをこの街に留まらせていた。

クリスマスイブの夜、コタツの中で酒を飲んで酔っ払っていたあたしは、突然、10年前に別れた（厳密に言えばあたしが捨てた）元カレ、井沢孝之^{いざわたかゆき}に電話する事を思いついた。

10年も前のケータイ番号がまさか繋がるとは思っていなかったのだが、何と孝之は電話に出た。

その時、家に誰もいなかったのをいいことに、あたしは彼を呼び出し、話をして、そして10年ぶりに体を重ねた。

問題はその後だった。

彼に再び逢おうと目論んで出かけた同窓会で、孝之は3年前に交通事故で死んでいる事を聞かされたのだ。

悲しむどころではなかった。

驚きのあまり、あたしは只々、呆然としていた。

あれは幽霊だったのか。

もしくは、酔っ払ったあたしが見ていた夢だったのか・・・。

でも、あたしは確かに彼とやる事はやった。

彼の滑らかな筋肉質の肌の感触まで、まだはつきりと思い出せる。

真相は分からないまま、あたしは何度も彼に再会しようとケータイに電話を試してみた。

だが、一度は繋がった筈のケータイからは、「お掛けになった電話番号は現在使われておりません」という、お馴染みのアナウンスが流れるのみだった。

それから、彼の事が気になって、あたしは仕事が決まるまでは、彼が生きていたこの街に留まる決意をした。

何故って・・・。

あたしは気付いてしまったのだ。

彼と別れて後悔していた事を・・・。

天然の茶髪に色素の薄い琥珀色の瞳。

陸上部で鍛えた長い筋肉質の手足。

スラリとした長身は完全にモデル体型で、遠くからでも人目を引いた。

そんなイケメンをあたしは10年前、つまり25才に時にフツてしまったのだ。

彼はチャライ外見に似合わず、真面目で几帳面で、しかも口が悪くて、乱暴で、融通が利かなかった。

昭和のオヤジかというくらい、頑固一徹、そして、優しい人だったのだ。

そして、あたしは彼に反して、いい加減で移り気で、所謂、八方美人な人間だった。

今、思えば、相反するあたし達だったから、お互い好きになったのかもしれない。

人は自分がないものを求めるのだから。

でも、一途な彼は、時にあたしを束縛した。

まだ、若さを持て余していたあたしは、彼とこの街で一生を終える事は考えられなくて、彼が結婚を口にし出した時、別れを告げたのだ。

結婚ってホントにタイミングの問題なんだと思う。

今、35歳で切羽詰ってるあたしなら、二つ返事でOKしただろうに。

今更、後悔しても遅過ぎる。

何と言っても、彼は3年前にもう死んでいるのだ。

あのクリスマスイブの不思議体験は、神様がくれたトキメキのプレゼントだったんだろう。

でなければ、実はあたしを恨んでる孝之の幽霊だ。

どちらでもいい。

あたしはもう少しの間、彼との思い出が残るこの街に留まりたかった。

「ねえ、松本さん、幽霊って信じます〜!？」

ぼんやりと孝之の事を回想していたあたしは、突然、タイムリーな質問をされて飛び上がった。

まさか、あたしが霊の事を考えていたとは思わない裕香ちゃんが、ワゴンの反対側から手に息をハーハー掛けながらこっちを見ている。

「な、なんで!？ヘンな事言わないでよ。気持ち悪いじゃん」

「でしょ〜!？でも、この百貨店の裏に商店街のアーケードがあるじゃないですか。そこに怪しげなカフェができたんですよ。占いカフェって言って、死んだ人ともお話させてくれるんだって。メチャ、胡散臭くないですか?」

・・・胡散臭い。

でも、その時、藁をも掴む心境だったあたしの胸はドキン!と鳴ったのだ。

女ってホントにバカだと思う。

占いとか、おまじないとか、幽霊とか、科学的根拠がないものに何故、惹かれてしまうのだろうか。

最近流行らしい天然石の数珠を何重にも腕に巻きつけてる女性客。

朝「今日の占い」をテレビで見て、「最下位は乙女座のアナタ」と言われてマジへこんでるあたしの母親。

かく言うあたしも「今日のラッキーアイテムはピンク！」と聞いたら、ピンクのハンカチを持っていたらしまう。

幽霊もまたしかり。

イケメンだったにも拘らず、一途過ぎる性格がウザイと思っていた孝之が、死んだ途端に美しい思い出になる。

幽霊になったと思った途端に、神聖視してしまうのだろうか。

実を言えば、孝之に再会する為、恐山まで行ってイタコに降霊してもらった事まで考えていたのだ。

それが、ここから500m離れたアーケード内の占いカフェで、コーヒー飲みながら、霊と話せる。

サファリパークじゃないんだから、あちこちに霊がウロウロしている訳ではないだろうが、青森県まで行く手間暇を考えたら、ずっと効率的だ。

嘘だったとしても、コーヒー飲んで帰ってくればいいんだから、スタバに行くよりは有意義だろう。

行っても損はなさそうだ。

そう考えて、あたしはバイトが終わったその夜、裕香ちゃんと占いカフェ「ロザリオ」のドアを叩いたのだ。

占いカフェ「ロザリオ」と書かれたアンティークな雰囲気の木製の看板が、同じく重厚な木製のドアに掛かったまま、風に煽られ、ガツタン、ガツタン音を立てている。

外壁だけ、と言うより見える部分だけレンガが張ってある戸にはワザとらしく蔦が絡まっていて、年季が入っているように演出されている。

最近、オープンしたばかりなのに、蔦が絡まるとは、自作自演も甚だしい。

しかも、アンティークなのはその店だけで、右隣は自転車屋、左隣は乾物屋という昭和の趣だ。

あたし達は並んで、アンバランスな和洋折衷の雰囲気のドアを開けた。

中は薄暗くて、光源が全く入らないように、にカーテンが引かれている。

オルゴールミュージックが静かに鳴っていて、キャンドルライトにボンヤリと照らされた店内は幻想的な雰囲気だ。

壁に建て付けられた棚の上には、かわいいコーヒークップや、ガラスのグラスがズラリと並んで、耐震対策は全く考えられていない。

入り口付近に丸テーブルが二つ、そして半円形のカウンターが中央にドンとあって、その周りを囲むように椅子が並んでいる。

その構造から、この店の前はスナックだった事が窺える。

カウンターの中央には、一人の男性が立っていた。

少女マンガでよく見る執事のような服装に、髪をオールバックにしている。

シャープな輪郭に東洋的な切れ長の目。

間違いなく、執事をイメージしたコスプレだ。

イケメンの部類に入るのは間違いなくて、イタコさんよりは目の保養になるかもしれない。

「お帰りなさいませ、お嬢様方」

執事はニツコリ笑ってそう言う優雅な仕草で、カウンターの前に並んだ椅子に手を差し出した。

ここに座れという事らしい。

「やっただあ！ここって執事カフェでしたっけ？お嬢様って、なんかウケルんですけど」

さすが女子大生。

若さの力で順応してしまった裕香ちゃんが、キャピキャピしながらあたしを残して椅子に座った。

あたしも慌ててその後を追ひ、彼女の隣に腰掛けた。

「執事もしますが、勿論、占いもできますよ。こう言つと喜んで下さる女性が多いので、挨拶代わりに言うようにしてます。お飲み物は何になさいますか？」

そつのない笑顔で、彼は笑うと差別しないように、あたしにも問いかけてくれた。

少し高めの良く通る声。

その声と凜とした清楚な佇まいに、教会の牧師さんみたいな印象を受ける。

「あ、じゃあ、カフェオレをお願いします。」

「えー！松本さん、飲みましょうよお。ねえ、ここ、アルコールもあるんでしょ？」

「ごきますよ。お車でなければ」

・・・車で来てるし。

そう思ったけど、このお気楽大学生は帰りの事など考えてもないようだ。

大方、あたしに送らせるつもりなんだろうけど。

結局、あたしにはカフェオレ、裕香ちゃんにはカクテルを執事は用意した。

「今日は占いを御所望ですか、お嬢様方？」

コーヒーカップを口にしながら、まだ店内をキョロキョロしているあたし達に執事は声を掛ける。

そうだ、本命はそれだった。

イケメンを至近距離で見ただけでも今日の収穫は大きかったけど、あくまで目的は孝之だ。

あたしがオズオズと口を開こうとしたその時、横から裕香ちゃんが

先に口を挟んだ。

「あたし、彼氏欲しいんですけど、どうやったらできますかあ
〜？」

・・・んな事、自分で考えろっつーの！

思わず出そうになったツツコミを、あたしは必死で胸に収める。

彼女だって、それなりに必死なことには違いない。

あたしより、時間的に余裕があるだけで。

執事はニツコリと笑いながら、ボードの上に置いてあるソフトボールくらいの水晶玉をカウンターに持ってきた。

小さな赤い座布団の上に載った透明無地の球はあたしが顔を寄せると微妙に色を変える。

神秘アイテムナンバーワンだ。

彼は白い長い指で水晶球の周りにクルクル円を描いた。

そして、裕香ちゃんの顔とその反射した影の歪み具合を見比べて、

「今年、運命の出会いがあります」と自信有り気に答えた。

「え〜！っそれって、もしかして、店長さんの事じゃないですか〜
！？今日って運命の日〜！？店長さんっておい〜くっ〜？」

「あなたより年上なのは確かですね。僕はもう若くないですよ、お嬢様。」

彼は軽く裕香ちゃんをあしらうと、あたしに向かってウィンクした。

・・・そのウィンク、どういう意味だ！？

あたしと同類なのをアピールしたいのか！？

複雑な気分で、あたしはカフェオレを啜る。

彼はあたしをしばらく眺めていた。

イケメンの悩ましげな視線が痛くて、あたしは思わず赤面して上目遣いに彼を睨む。

「・・・なんですか？あたしの顔に何かついてます？」

「・・・はい、あなたには霊がついてますよ。それもかなり強い、ね」

「・・・え！？」

あたしを見つめていたと思っていた執事の視線は、あたしを通り越して何もない壁を睨んでいる。

あたかも、あたしの後ろに誰かがいるように。

あたしは、見えないものを見ている執事の視線の先を、恐る恐る振り返った。

「やったああ！何ソレ！？松本さん、憑り付かれてるんですかあ？」

カクテルを吹き出しながら、「冗談かと思った裕香ちゃんが茶化して叫んだ。

あたしも思わず、後ろを振り返ってキョロキョロ見回す。

勿論、そこにいるのは孝之じゃないのかって思ったからだ。

執事はジッと何もない壁を睨んで続けた。

「その霊はあなたに強い恨みを持っています。男性です。かなり強い霊力だ……。このままでは、あなたに霊障が起る……。あなた、早くこの土地を離れた方がいいですよ……。」

「ええ〜！あたし、失業して年末にこっちに来たばかりなんですけど！？」

「そんな事より、命が大事でしょう？できるだけ早く引越すべきです……。一度、御被いした方がいいかもしれませんね。今、ここで予約されれば20%オフにしますが……？」

「は！？20%オフって、御被いの代金！？」

「勿論、こちらでも商売ですから。御被いの通常価格3万円ですが、今回は初回キャンペーンも同時に使えます。最大30%オフ！これはお得ですよ。」

「松本さん！やったほうがいいですよ〜！男運悪いのも直るかも〜」

ふざけんな！と言いかけた所に、裕香ちゃんまでが合いの手を入れ

る。

キレたあたしはカバンを掴んで立ち上がった。

「結構です！そんなのインチキに決まってるじゃない。靈感商法もいいとこだわ！もう帰ります！お勘定は！？」

「はい、カフェオレ800円になります。」

カフェオレが800円！？

ラーメン食べた方がマシじゃん！？

にこやかに返事をする執事に、あたしは更に噛み付いた。

「ちょっと！なんでカフェオレが800円なの！？スタバより高いじゃん！つか、ラーメン食べれるし！」

「テールチャージが含まれておりますので、若干高めの設定になっております。霊視の料金は今回はサービスさせて頂いておりますよ。」

「何が霊視よ！信じられない！もういいわよ！釣りはいらなから！」

あたしは1000円札をバン！とカウンターの上に置いて、荒々しく店を出た。

憤慨しながら家に辿り着いたあたしは、まずはお清めとばかりにバスルームに直行した。

シャワールの蛇口を捻って、お湯を頭から滝のように浴びる。修行僧の如く、あたしはしばしシャワーに打たれていた。

ムカツク！

ムカツクったらムカツク！

どーしてあたしが孝之に恨まれなきゃなんないのよ。

そりゃ、付き合ってた時はないがしろにしてきたし、あまり尽くすタイプの彼女じゃなかったかもしれない。

でも、高校の時から付き合い始めて、別れるまで8年も一緒にいたんだもん。

付き合い長すぎて、夫婦のような馴れ合いの関係だったから、遠慮なく好きな事言ってたかもしれない。

結局、長過ぎた春が倦怠期と重なって、刺激が欲しくなったあたしが別れを切り出したんだけど。

孝之はもしかして、死んでも死に切れない程、あたしの事恨んでたのかなあ……。

だったら、あのクリスマスイブの事はやっぱりあたしの夢だったんだろうか。

熱いシャワーを浴びながら、あたしの目から涙がポロポロ零れてきた。

さっきのイケメン占い師は、あたしからふんだくる為に、見えてもないクセにテキトーな事を言ったのかもしれない。

でも、心当たりがあるあたしには、その言葉が重く押し掛かってきた。

・・・また、会いたい。

本当は怒ってるの？って、聞いてみたい。

もし恨んでるなら、一言、ゴメンネって言いたい。

そうでなければ、あたしだって死んでも死に切れない。

そう思ったあたしは、タオルを掴んで、バスルームから飛び出した。

「えーっと、ビールと安物のワインと、確かスルメイカがあったっけ……。そして、コタツの上には蜜柑……。と。」

自分の部屋に戻ったあたしは、記憶の糸を手繰り寄せながら、あのクリスマス夜の夜を再現しようと試みていた。

そう、確か、テレビを一人で見ながら、ビール飲んで酔っ払ってて……。

その後、ケータイから電話したんだっけ。

テレビをつけて、スルメイカを齧りながら、あたしは缶ビールを開けて一気に飲み干した。

酔い加減はこのくらいだったかな……。？

いや、あの時はもっと飲んでたかも。

そもそもが酔っていたので、当時の記憶は更に曖昧なものになっていた。

記憶を手繰りながら、あたしは景気付けに更にビールを開ける。

そして3本くらい飲み干した後、ようやく眩暈を感じたあたしは、コタツに入ったままゴロンと仰向けになった。

そうだ、ケータイ、ケータイ……。

お願い、電話に出て、孝之……。

あたしは酔いで震える手にケータイを握って、アドレスをスクロー

ルした。

まだ消えていない井沢孝之の名前。
ドキドキしながら、あたしが発信ボタンを押そうとしたその時。

パン！

大きな破裂音がして、突然、部屋の電気が消えた。

一瞬にして暗闇となったあたしの目の前で、ケータイ画面だけが光源になって、何とか周りが見える状態だ。

さっきまで付けていたテレビも同時に消えてしまったので、部屋は静寂に包まれる。

ブレーカーが落ちたんだろうか・・・？

あたしが酔いの回った体を起こそうとしたその時、体の動きが突然奪われた。

何かに押さえつけられているような、体の上にモノが載っているような、すごい重圧感だ。

あたしは仰向けのまま床にベタッと押し付けられた。

こ、これって・・・噂の金縛り・・・？

動かない体の中で唯一動いた目をキョロキョロさせて、あたしは部屋を見回す。

誰もいない筈の小さなあたしの部屋。

部屋の隅に置いてあるシングルベッドの上に、あたしは信じられないものを見た。

両足を抱えて座っている人があたしを睨んでいる。

暗い影のようなその人は、シルエットから男性である事が分かった。あたしと視線が合うと、その影はゆっくり立ち上がり、こちらにスーッと向かってくる。

歩いている感じはない。

足にローラースケートがついているように、ブレる事なく影は真っ直ぐあたしの方に近付いてきた。

・・・だ、誰！？孝之なの！？孝之！？

影はあたしの体の上までスーッと載ってくると、首に手をかけた。覆い被さってくるその影の顔を、あたしは硬直したまま凝視するが、誰かという判別ができない。

怖いのに視線を逸らすことも適わなかった。

「・・・・・・・・！！！」

首に掛かる手があたしの首をグッと締め付け、あたしは息を呑む。

恐怖と酸欠で抵抗する事ができない。

目の前がゆっくりと暗くなっていて、あたしは、そのまま意識を手放した。

「松本さん、ひどいですよ。昨日、あたし、飲んじやったから一人でタクシーで帰ったんですよ。もう、何で急に帰っちゃったんですか？」

二日酔いの頭に、ノリノリ女子大生の甘ったるい声は脳味噌をえぐられるようだ。

蛍光ピンクのウィンドブレーカーに身を包んだあたしは、百貨店の前のワゴンの前で道行く人々をボンヤリ眺めていた。

昨夜の恐怖の心霊体験のせいで、仕事するという心境では全くなかったが、バレンタインまで後2週間を切っている。

今日休んだら、会社もバイトを補充するのが大変だろう。

そう思つて、悪夢の一夜が明けてから、あたしは取り合えず外傷が無い事を確認した。

二日酔いの体に「ウコンの力」を注入して、何とかバイトに来たのだ。

社会人生活が長いと、会社の都合まで考えてしまふ、我ながら殊勝な心意気だ。

それに免じて正規採用にしてくれば、もっといいのだけど。

「当り前でしょ！？あの店、絶対怪しいし。なんだかんだ言つて、御被い代やら、壺やら、数珠やら、売りつける気なのよ。大体、何であたしが霊の恨みを買わなきゃなんない訳？」

ワゴンを挟んだ反対側にいる裕香ちゃんに、あたしは反撃する。

そうだ、霊（しかも男の！）に恨みを買う覚えなどない。

あるとすれば、生前、邪険に扱ってきた孝之くらいだけど、昨夜のあの影が孝之だったのかどうかは確信がなかった。

・・・孝之というよりは、そう・・・。
もっと暗くて地味な感じの、執念深い人・・・。

そこまで考えて、あたしは金縛りや首を絞められた感触を思い出してゾッと鳥肌が立った。

「でもお、あのイケメン占い師の人、霊が見えるんですって。それに、松本さんが男の人に恨みを買ったの、あたしは分かる気するなあ」

ニヤニヤしながら、裕香ちゃんは聞き捨てならない事をのたまう。
あたしは目を剥いて、ワゴンの後ろの彼女を睨みつけた。

「それ、どーゆー意味よ！？何で、あたしが男の恨み買ったの！？」
「だってえ、松本さん、天然じゃないですかあ。結構かわいいのに、鈍いっていうかあ。思わせ振りの態度をしないとから、そんな気ありませんでした、みたいな？勘違いさせちゃう罪な女って感じですかね」

「いつ、あたしが思わせ振りの態度したのよ？」
「だから、松本さんは無意識にそういうのやっちゃうんですよ。だから、男は勝手に勘違いして、自滅するんです。」

あたしは、考え込んでしまった。

自分が八方美人でいい加減な性格なのは自覚していたので、裕香ちゃんの言葉にも思い当たるフシがない事もない。

ただ、生きてる男ならともかく、霊に恨みを買ったほどではないと思う。

「でもお、これっていい意味ですよ」。松本さんの近くって、なん

か暖かくて、明るい感じがするんですよ。非モテ男は、明かりに群がる蛾みたいに吸い寄せられちゃうんじゃないのかな」

取り繕うつもりなのか、裕香ちゃんは褒めてるのか、貶してるのか微妙なコメントをする。

その気持ちはありがたいけど、生憎、非モテ男もモテ男も、あたしの周りには飛んで来る気配がない。

・・・もう一度、あの店に行ってみよう。

インチキ占い師を信じていた訳では全くない。

でも、昨夜の不思議体験を誰かに聞いて欲しくて、あたしは唐突にそう思った。

恨みどころか殺意まで感じた昨日のあの影。

あれは孝之じゃないって、誰かに言って貰いたかったのだ。

『占いカフェ ロザリオ』は昨日と同じように、自転車屋と乾物屋に挟まれてアンバランスなアンティークな雰囲気を出していた。今日は裕香ちゃんも合コンとかで、バイトが終わるとさっさと帰ってしまったものだから、あたしは一人で店の前に立ち尽くしていた。

月が出ているせいで、店の前はボンヤリと明るく、開店したばかりなのに古びた看板がはっきり見える。

その扉を見つめて、入ろうか、入らまいか、しばらく考えていた矢先、突然、中から扉がバーンと開いた。

「キャ！ごめんなさい！」

3人の制服姿の女子高生がキャピキャピ騒ぎながら、外に飛び出してきて、あたしは思わず後ずさる。

何の悩みもなさそうなテンションの高さだったけど、ここに来たという事は何か悩みがあるんだろう。

そうでなければ怖いもの見たさか、イケメン執事を観賞しに来たか。

あたしは、もう中に客がいないのを確認してから、恐る恐る足を踏み入れた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」

店内の正面に設置されたカウンターのの中で、昨日の執事はにこやかに声を掛けた。

昨日と同じオールバックにした艶のある黒髪に切れ長の目。

自分がイケてるのを自覚した上で、なんかの少女漫画に出てくる執事のコスプレしている。

よほどのナルシストか、そうでなければ、かなり残念なマンガオタクだ。

あたしは警戒しながら、そろりとカウンターの椅子にお尻を載せた。カフェオレ800円は仕方ないにしても、御被いをこのコスプレ執事をお願いする気はなかった。

たとえば、それが最大30%オフで、21000円に値下がりしても、だ。

そもそも、孝之に会いに来たのだから、被われては本末転倒というものだろう。

追い詰められた小動物みたいに固くなっているあたしを、執事は苦

笑して見つめた。

「そんなに怖がらなくても、僕は押し売りはしませんよ。昨日言った事、もし、気にしてらっしゃったら、申し訳ございません。ただ、僕は本当に見えてしまう体質なんです。」

「・・・本当なのは分かってます。あたし、昨日、霊に襲われたんです。金縛りにもあつて・・・」

ああ・・・と何故か納得した顔で、執事は切れ長の目を細めた。

「では、あなたはまだ気が付いてなかったんですね。これは失礼しました。」

「・・・？何をですか？」

カウンターに頬杖ついているあたしの顔を見て、彼はにこやかに恐ろしい事を言った。

「あなたも僕と同じ、『見える』体質なんですよ。」

あたしに霊が見える！？

いや、見えてないけど。

そんなの今まで見た事ない。

見えるどころか、子供の頃、お盆にやってた「あなたの知らない世界」特集を見て、震え上がった側の人間だ。

見たとすれば、クリスマスイブに現われた孝之くらいだけど、あれは幽霊というには微妙な感じだ。

寧ろ、見えないから、こんなとこまで800円のカフェオレ飲む覚悟で来たんじゃない。

何を言われているのか分らず、あたしは眉間に皺寄せて執事を見た。

あたしの反応を見て、彼は可笑しそうに笑う。

「あなたはきっと人間か幽霊かの判別つかない位にハッキリ見えているんですよ。今まで会った人の中には、本物の霊もいたはずですよ。霊だと気が付かなかっただけで。会った人が実は亡くなってたなんて体験、今までありませんでしたか？」

「・・・あ、ある・・・かも」

それは、ある。

会ったところかエッチまでした、3年前から死んでる孝之の顔がすぐに頭に浮かんで、執事の言葉の意味をあたしはやっと理解した。

リアル過ぎたあのクリスマスイブの夜。

電話で呼び出し、エツチまでした孝之がまさか死んでるなんて夢にも思わなかった。

いや、寧ろ、夢だったんだと思っていた。

執事の言う事が本当なら、やっぱり孝之はリアルな幽霊だったのか・
・。

人間×幽霊の奇跡の異種交配は、靈感の強いあたしだから実現したケースなんだろうか？

「でも、昨日のあの心霊体験は！？アレ、完全に悪霊入ってたし！あたし、生まれて初めて金縛りとか体験しちゃったんですけど」

「それは、その霊があなたより強くて、意図的に攻撃してきたんでしょう。悪意のない浮幽霊は素通りしていきますからね。その場合、普通の人には見えない霊が、あなたにはハッキリ見え過ぎて、人が霊か区別がつかないんですよ。」

「・・・はあ。じゃ、昨日のはやっぱり、あたしを恨んでる孝之だったって事？」

「違うと思います。孝之さんが誰かは知りませんが、その霊は今、ここにいますから」

その言葉に、あたしはギョっとして執事の視線の先を見た。

鷹揚な口調とは裏腹に、カウンター越しに立っている執事表情は険しくなっていた。

筆で描いた様な眉の下の細められていた切れ長の目が鋭くなり、形のいい薄い唇がギュッと噛み締められる。

彼が見据えるその方向から、冷凍庫を開いた時のような冷気がスーッと漂ってくるのを肌で感じた。

尋常でない執事の形相と得体の知れない冷気に、あたしの背中がゾッと寒くなる。

「な、何ですか？執事さん、何、見てんのよ？」

「・・・昨日からあなたに憑いている霊ですよ。今、そこにいます。昨日は大人しくしてくれましたが、今日はそういう訳にもいかないみたいです。あなた、なんか男を泣かす事しました？」

「しつ失礼ね！人聞き悪い事言わないで下さい！泣かすどころか、最近、男の子と話なんてした事ありません。ナンパもされてません！」

「でも、あなたに弄ばれたって言うてますよ？」

「ブっ！な、何ですか、それ！？そんな事できたのは20代までです！30代になってからは、声も掛けてもらえません！」

あたし達が掛け合い漫才をしている間に、執事の視線の先の壁からうつすらと白い靄のようなものが湧き上がってきた。

靄は次第に濃くなり、煙のように立ち昇りながら、自らを形作っていく。

あたしは驚異の現象に口をあんぐり開けて、硬直していた。

やがて、白い煙は天井に向かって巻き上がると、そこには立ち尽くす一人の男性の姿が現われた。

小柄で小太りな眼鏡をかけた30代くらいの男だ。

「けいおん！」と書かれた萌え系アニメがプリントされているダサダサトレーナーは、ジーパンの中に入ってベルトで締められている。背中には何故かリュックを背負っていて、ウルトラマンのフィギアのストラップがジャラジャラぶら下っている。

髪はかなり後退しており、禿げ上がった額と背中に伸ばした長髪のせいで、まるで平家の落ち武者だ。

アキバとか大須とかの電気街に必ずいるこのタイプの男性。

あたしの友達には絶対にいないと断言できる。

でも、どこかで見たような・・・？

硬直している脳味噌をフル回転させて、あたしは必死に思い出そうと試みた。

その時、男の霊は俯いていた顔をゆっくりと上げた。

あたしを真っ直ぐに見つめる眼鏡の奥の瞳がキラリと光って、ポテつとした丸い顔が歪んでニヤリと笑った。

途端に、笑った唇の端からボタボタッと血が滴る。

「ひ、ひええええ！！！」

あたしは恐ろしさのあまり、悲鳴を上げながらカウンターの上部によじ登って、執事が立っている内側に飛び込んだ。

「執事さん！あ、あんな人、知り合いにいませんか！？誰なの？
ってか、何、あの無駄にリアルなおタクスタイル！」

執事にしがみ付きながら、あたしはパニックになってキンキン声で叫んだ。

「僕が知る筈ないでしょう。でも、彼はあなたを知っていますよ。
弄ばれたって怒ってますからね。」

執事は目の前で起った超現象に驚いた様子もなく、淡々と話をする。
一応、拝み屋やってるんだから、こんなの見るのに慣れているんだ
ろうか。

霊とは思えないリアルな動きで、オタク男はゆっくりと歩いてカウンターの方に近付いて来る。

足は両方ついてて左右交互に動かしているが、足音は昨日と同じく

全くしない。

唇から滴る血だけがリアルティを持って、歩く度にポタツポタツと滴り落ちた。

「し、執事さん！御被いお願いします！通常料金3万円から30%オフで！支払いはバイトの給料日の25日でもいいですか！？もしくは失業保険の下りる来月15日で！ってか、早く何とかしてください！！！」

パニックになったあたしは支離滅裂な事を喚きながら、執事に抱きついてガクガクと揺さぶった。

なのに、彼は前を見つめたまま返事もしない。

「ちよつと！？執事さん、聞いてんの！？ねえってば・・・！？」

彼は返事をすることなく、揺さぶるあたしの力に押されるようにグラリと傾き、カウンターの下に崩れ落ちた。

「きゃあああ！ちよつとお！どーしちゃったの！？？」

びっくりしたあたしは、ぐったりと蹲るような姿勢で倒れている執事の背中に追い縋った。

その時を待っていたかのように、彼の両手があたしの両足をグッと掴んだ。

その勢いであたしはひっくり返され、カウンターの下で尻餅をつく。

「キャ！な、執事さん・・・！？」

そこまで言いかけて、あたしは息を吞んで手で口を押さえた。

蹲ってあたしの両足首を掴んだ執事の顔がゆつくりと上がる。

切れ長の目が大きく見開かれ、その唇から血がボタボタ滴り落ちる。

「オ・レ・ヲ・モ・テ・ア・ソ・ビ・ヤ・ガ・ッテ・・・」

さっきまでの執事のテノールとは全く別人の声が、その唇から発せられた。

「オ・マ・エ・ヲ・ユ・ル・サ・ナ・イ・・・」

イケメン執事の美しい顔は恨みに歪んで、形のいい薄い唇の間から血がボタボタ滴ってくる。

その形相は正にステレオタイプのバンパイアだ。

今時、こんなの流行らないよって位に、彼はモンスターと化している。

あたしはその時やっと、彼の豹変振りの訳を理解した。

さっきまでこっちに向かって来てたアキバ男の霊は、今、執事さんの体に憑依して彼を動かしてるんだ。

人から3万も御祓い代巻き上げようとしてたクセに、自分が憑りつかれてるとは、どんな拝み屋だ。

全然、ダメじゃん！

お金払ってないのがせめてもの救いだ。

恐怖で完全にパニックったあたしは、ぎゃあぎゃあ悲鳴を上げながら、掴まれていた足を夢中で振り上げ、イケメンの顔目掛けて踵落としを喰らわせた。

バカン！と小気味良い音がして、彼はよろけながら顔を両手で覆うと、一瞬、あたしから体を離れた。

その隙をついて、あたしはカウンターによじ登って飛び越え、店の出口に向かってダーツと全力疾走する。

あたしに蹴られた顔を抑えながら、執事はヨロリとカウンターの中で立ち上がると、ゆっくりとそれによじ登り、落下するように何とか飛び越えた。

体が馴染んでないのか、全ての動きが不自然だ。
ズルッズルッと両足を引き摺るように、彼はゆっくりとこちらに向
かって来る。

血に染まった真っ赤な口が大きく開かれ、地獄の底から響いてくる
かのような呻き声が発せられる。

その形相はもはや執事でさえない。

バンパイアも通り越して、ジョーズの域までいっちゃってる。

半狂乱になりながら、あたしはアンティークな木造の扉を開けよう
と、取っ手をガタガタ引っ張った。

が、鍵は開いているのに、扉はビクともしない。

うわああ、オカルト映画でよくある展開だ。

貧困な発想力だが、お約束の行動をしているあたしも、映画みたい
に殺されちゃうんだろうか？

あたしの脳裏に浮かぶのは、昔見た映画『バタリアン』。

お願い！

誰か、助けて！

孝之！

「孝之！」

唐突に頭に浮かんだ孝之の名前を、あたしは思わず口走っていた。
無駄な足掻きと知りながらも、あたしはダウンジャケットのポケッ
トに入れっ放しだったケータイを引っ張りだす。

何度も彼と話そうとチャレンジしてたお陰で、リダイヤルボタン一
つで彼のケータイに発信できた。

お願い！お願い、出て！孝之！！！！

目をギュッと瞑ってあたしはケータイを握り締めて、ひたすら祈った。

ルルル・・・ルルル・・・ルルル・・・

・・・あれ!?

いつものソフトバンクのアナウンスではなく、聞き慣れたコール音が聞こえてきて、あたしはギョッとした。

もしかして繋がる!?

「あなたの知らない世界」にいる幽霊、孝之に!?

この状況を何とかしてくれるなら、もうこの際どこの誰でもいい。そう思った時、ケータイから聞き覚えのある懐かしい低い声・・・!

「もしもし?井沢ですが?」

「たっ、たっ、たっ、孝之!?!孝之なの!?!」

キターーーーー!!!

なんでか知らないけど、孝之デターーーーー!!!

気だるそうな彼の声を聞いて、あたしは安堵でブワッと涙が出た。

あたしの置かれた状況を知らない彼は、面倒臭そうに返事をする。

「・・・あんだよ。誰か知らずにかけたのかよ?相変わらずテキストなヤツだな。」

「そっ、それどこじゃないんだって!あたし、殺されそうなの!お願い、助けに来て!」

「はあ?何だよ、それ?お前、どこにいるの?」

「駅前の百貨店の裏にあるアーケード街！占い喫茶口ザリオってお店！ねえ、早く来て！今すぐ来て！」

「早くったって、俺、今、起きたばかりだし・・・」

「な、何言ってるのよ！死んでるクセして！おシャレなんて生前からしてなかったじゃん！いつも同じ服着てたのに今更何言ってるのよ！そのままでもいいから早く来て！」

「・・・死んでて悪かったな。お前ね、それが人にモノ頼む態度？」

あたしの暴言に、電話の向こうの彼はムつとした様子で反撃してきた。

うああ！もおお！

死んでからも融通が利かない孝之に、あたしはやっぱイライラさせられる。

そう言えば、生きてる時も、くだらない事でこんな風に言い争っていたんだっけ・・・。

だからイケメンでも、ウザくなって別れたのを思いだした。

でも・・・今は・・・！

血を吐きながらズルズルと音を立てて、執事はどんどんあたしに近付いてくる。

憎悪に染まった真つ赤な瞳があたしを捕らえた。

途端に、体の自由が利かなくなつて、あたしはケータイを握り締めたまま硬直する。

昨日と同じ金縛りの感覚だ。

「おい、恵理っぺ？何とか言えよ。ごめんなさい孝之様って言うたら許してやる」

「子供か！？そっ、それどこじゃないんだって！！孝之！助けて！！！」

「分かったよ、うるせえな。今行くから、待ってる」

「も、もう待てないんだって！早く！」

執事は目の前まで来ると、硬直しているあたしを頭からつま先まで舐めるように視線を絡ませ、ニヤリと笑った。

バンパイアスタイルもイケメンがやると、それなりにかっこいいんだから不思議なものだ。

動けないあたしの首に、彼の白い指がかかって爪が肌を引っ掻いた。その爪の先が皮膚を突き破ろうとしたその時。

パンー！！

大きな破裂音が部屋全体に響き渡った。

飾り棚に並べられていたコーヒークップが一瞬にしてパパパン！と割れ、破片が部屋中に飛び散る。

あたしの首に手をかけていた執事の顔が驚愕で引き攣った。その途端に、彼の体は前から大きな力で突き飛ばされたようにドーンと吹っ飛ばされて、カウンターに音を立てて激突した。

自由になったあたしはその場にへ尼亚へ尼亚とへたり込み、ゲホゲホとむせ返る。

「来てやったぞ。ありがたく思え。・・・ってか、アレ、誰！？」

懐かしい低い声が、あたしの頭の上から響いてきた。

声の方向を見上げたあたしの横に立ちはだかるその姿。

ジーンズを履いた長い足、黒いパーカーとハイネックのシャツ、長めの茶髪。

ああ、やっぱりいつもと同じ服着てる。

それでも、あたしは嬉しかった。

死んでる筈の孝之が、今、あたしの横に立っているその事実！

「おい、恵理っペ！何だよ、あの人？何でお前のこと恨んでんの？」

へたり込んでるあたしを見下ろして、孝之は怒鳴った。

血色の悪い白い顔に、琥珀色の瞳と色素の薄い茶髪が妙に似合っている。

間違いなく孝之だ。

イケメンでも融通が利かなくて、理屈っぽくて、一途だった孝之！死んでる筈なのに、すごい生氣を感じるのは気のせいか！？

「あ、分かんないの。なんか、あたし、逆恨みされてるみたいで。

あたしに弄ばれたって言うてるらしいんだけど……。でも、孝之、あんただって……」

・・・死んでるんじゃないの！？

という疑問は取り合えず、口に収めた。

要らん事言って、帰ってしまったら元も子もない。

帰るにしても、あのモンスターと化した執事さんだけはどーにかしてもらわなければ！

「弄ばれたあ？お前、また何の気なしに男に気を持たせる事したんじゃないの！？気のあるフリして近付いてから、実はそんな気ありませんでした、みたいな？」

意地悪そうに横目であたしに視線を落としながら、孝之は鼻で晒った。

奇しくも、今日裕香ちゃんに言われたのと全く同じ言葉が孝之の口から出て、あたしはぐつと返事に詰まった。

「・・・なんで、そう思うのよ？」

「なんで？よく言うよ。俺も最初はそれで引つ掛けられたじゃん。・・・ってか、今はそれどこじゃねえだろ！」

孝之の怒鳴り声にあたしもハッとして前方を見た。

孝之が降臨した時のシヨックで、吹き飛ばされてカウンターに激突した執事さんは、頭を振りながらヨロヨロと起き上がった。

カウンターにもたれるように何とか立ち上がると、再び、あたしの方に向かってズルズルと足を進めた。

その歩みは、ゆっくりではあるけど、ダメージを受けたようには見えない。

ゾンビのようなしぶとさに、あたしはゾクつと寒気がして、思わず孝之の足にしがみ付く。

「ひっひえええ！こつち来るよ！どーしよ、孝之！？」

「あの人の中に、なんか入ってるだろ？まず、それを出さないと・・・。お前、ちよつと蹴り入れてこいよ」

「や、やだよ！それができるくらいなら、最初からあんななんか呼ばないって！」

「あんだと、てめー！せつかく来てやったのに、何だよ、その言い草は、ああ！？」

生前と全く変わらないあたし達の気の合わなさ。

こんな時なのに、やっぱり別れたのは正解だったのか、なんて思ってしまう。

その間にも、口を血まみれにした執事は、ズルズルとこちらに歩みを進めてくる。

それを見つめて、孝之はちつと舌打ちした。

「・・・しょーがねえなあ。恵理！ちよつとじつとしてるよ」
「え！？」

その瞬間、目の前が真っ白になった。

体が突然、動かなくなつて、あたしは思わず座り込む。

昨日の金縛りと同じような感覚だ。

自分の体なのに、自分の力でコントロールできない。
なのに。

あたしが動かしてない筈のあたしの体は、スクッと立ち上がった。

動かしてない筈のあたしの両手は勝手に組み合わされ、格闘家のようにボキボキと音を鳴らす。

「ちよ、ちよつと、孝之！？コレ何！？」

『お前の体、借りてる。ちよつとの間、大人しくしてろ』

孝之の声があたしの頭の中から響いてくる。

自分の意思とは無関係に動く自分の体と、テレパシーみたいに響いてくる彼の声。

その初めての体験に、あたしは気分が悪くなった。

「ジョーダン止めてよ！気持ち悪いじゃん！指鳴らすと太くなる」
「！」

『しょーがねえだろ！あいつが人間の体の中にいる以上、こっちも

生身の体で対応しないと。お前はいいから、力抜いてろって。さもないと、自分の手でいやらしい事させるぞ」

「エロオヤジか!？」

完全にあたしのコントロールから離れたあたしの体は、手始めに屈伸をして、アキレス腱を伸ばした。

両腕をグルグル回して、不自由なく動くのを確認すると、ニヤリと顔を歪ませて笑った。

自分の顔なのに、今までした事もないような悪い顔で笑っているのが分かる。

このニヒルな笑い方はイケメンの孝之には似合っても、35歳の女子のキャラじゃないだろ！

『すげえ！こんなに上手く融合できたの初めてだ。恵理と体の相性、良かったからかな?』

感心したような孝之の弾んだ声が頭の中に響いてくる。

「何それ？セックスの相性がいいと乗移り易いの?」

『理由は分かんないけど、いきなり初対面の人に移ろうとしても上手いじゃない。あの人みたいに動きが不自然になる。コントロールし切れないんだ。ま、俺はお前の体の事は、知り尽くしてるしな。』

「だからエロオヤジか!？って、どーでもいいから、早く何とかしてよ!」

『喚くな。久々の生きてる体だ。なんか気持ちいいじゃん!？』

孝之の支配下となったあたしの体は、僅か5メートルの所にまで迫っていた執事目掛けてヒラリと躍り掛かかると、その首に強烈なラリアットを喰らわせた。

あたしの右腕がイケメン執事の首のヒットして、その体がスローモーションのようにゆっくり背中から倒れてゆく……。

それを、あたしは別世界から覗いているような感覚で見つめていた。ドーン！と豪快な音を立てて、執事が床に倒れた後、その周りをボクサーのようなフットワークでピョンピョンとジャンプしている。全くもって無駄なりアクションだが、孝之が久し振りの生ボディにテンション上がってるのは間違いない。

しばらく警戒するように執事を観察していたが、起き上がってこない事を確認した孝之は、あたしの体で拳を突き上げた。

『イエッス！！ノックアウト！』

「でも、また起きてくるんじゃない？ トドメ刺しておかないと」

『大丈夫だよ。もうヤツを感じないもん。ホラ、言うだろ？ 考えるな、感じるって。お前は感じてればいいんだよ』

「……なんか、やらしいんだけど。孝之が言う……」

その時、執事さんの異変に気が付いて、あたし達はハっとして口を閉じた。

床に仰向けに倒れている彼の体から、スウッと煙のような白い気体が湧き上がってくる。

それはやがて、上方に向かって渦を巻きながら、一人の人間の姿を形成していった。

『……誰？ この人？』

困惑したような孝之の声があたしの頭に響いてくる。

「・・・だから、この人が執事さんの中に入ってたんだって。あたしに弄ばれたって言ってた人」

『・・・お前、男の趣味、変ったな』

「だから！あたしは覚えないんだってば！」

白い煙が消えた後、あたし達の目の前に一人の男が忽然と現われた。
だが。

想像に反するその姿に、あたしは思わず目を見張った。

それは、さっきの「けいおん！」トレーナーをズボンの中に入れた
アキバ系の男性ではなかったのだ。

さっきの人よりもっと地味で、何の特徴もない中年男性・・・。

「あ！！！！こ、この人！！！！」

今度こそ、その顔を思い出し、あたしは思わず指差して大声を出した。

『何？やっぱり知り合いか？』

「この人、バイトの初日にあたしが押し付けてチョコ売ったオジサンだよ！」

あたしの声に、目の前のオジサンは俯いて顔を背けた。

・・・あのバイトの初日。

全く売れる気配のないワゴンに山積みチョコレートを前に、あたしと裕香ちゃんはいぶーぶー文句を言っていた。

「こんなの売れるワケないですよ。まだバレンタインまで2週間もあるんですよ。その前に凍え死ぬ〜！」

「でも、まあ、これが仕事だし、お金貰ってんだしね」

「もー！松本さんは年の功ですけどお、あたしは若いから納得できません！」

「一言多いよ。じゃ、辞める？」

「辞めません！お金欲しいもん！」

「じゃ、しょうがないじゃん？」

裕香ちゃんはぶーたれた顔であたしを上目遣いで睨んだ。

「じゃ、松本さんは売れるって言うんですかあ？」

「う、売れる！営業のやり方次第で売れない商品なんてないのよ！」

「えー、じゃあ、見本見せて下さいよお。言っときますけど、チヨコって女の子が買うモノですよ〜」

「別に拘らなくてもいいんじゃない？最近は無頼な男子も多いことだし。売ればカモは誰でもいいのよ」

そう言った矢先に、あたし達の囲んでいるワゴンの横を一人の男性がスウツと音もなく、通り過ぎた。

何の特徴もない地味な中年男性だ。

会社員っぽいベージュのコートに身を包み、顔を隠すように襟を立てている。

中年男性というイメージ以外、顔の特徴は不思議なほど気が付かなかった。

「松本さん！いいカモじゃないですかあ。松本さんの魅力で、あの人にチヨコ軽〜く売っちゃって下さいよ」

裕香ちゃんがニヤニヤしながら、ワゴンの中から一箱掴むと、あた

しに差し出してきた。

「え、だって、チョコって女の子が買うモノでしょ？」

「カモは誰だっていいって、今、言いませんでした？」

言い返す術もない。

あたしはムカつとして、挑戦状の如く、箱を裕香ちゃんの手から奪い取ると、スーっと歩いていく男性の後を追いかけた。

「すみません！今、バレンタインキャンペーンやってるんですけど、お一ついかがですか？」

男性の前に立ち塞がったあたしは、できる限りの満面な笑顔を作った。

突然現われたあたしの顔に驚いたように、男性は一瞬、ビクッと体を震わせてた。

その時、あたしにはピン！ときたのだ。

・・・この人、慣れてない。

そこに気がついたあたしは更に調子に乗って、彼の手を取ると、強引に箱を握らせる。

手の感触に引き気味になる男性を、あたしは手に更に力を込めて引っ張った。

「今は男性から女性にチョコ渡すなんて普通なんですよ。彼女にあげてもヨシ！これからコクつてもヨシ！会社の同僚や上司にあげれば、御機嫌取りは間違いなし！とにかく男性からチョコ貰ったら、女は嬉しいんですから。もーここは、差別しないで誰にでもあげちゃいましょう！ささ！お一ついかがですか？」

男性は一気にまくしたてるあたしの顔をしばらく呆然と眺めていた。

この月並みな宣伝では、まだ、落ちないようだ。
こうなったら、女の武器を使っしかない。

甘えた声で、あたしは上目遣いに彼を見上げる。

「あたしもチョコ、全然、貰ってないんですけど、お客様のような
渋い方から突然、チョコ貰って告白されたら、きっと好きになっ
ちゃうと思いますよ。ここは一発、チョコで告白してみてもどう
ですかね？」

やがて、一通りの口上を聞き終えた後、男性はあたしが握らせてい
たチョコの箱を自ら掴んだ。

あたしはそれを、お買い上げの意味だと理解し、歓喜で飛び跳ねた。

「ありがとうございます！お会計は百貨店の一階にありますサー
ビスカウンターで！そちらでラッピングとメッセージのサービスも
承っております！」

そして、あたしは満面の笑顔をもって、男性をお買い上げレジに案内したのだ。

その男性がまさか死んでいたとは思ってもせずに……。

話を聞いた孝之は、ホラミロ！と言わんばかりに勝ち誇った顔をした。

もちろん、あたしの顔で。

『ホラ見ろ！気を持たせるような事言っただのはお前だったろ？』

「何だよ！こんなのタダの営業スマイルに、リップサービスじゃん！」

『よく言っよ。相手が経験値低めなの見越して、わざとやったんだろ？』

「やらしいのよ、孝之は！考える事がイチイチ、ネチネチと・・・」

いつも通りの口論になったその時、男性の影がスウッと薄くなった。

「あ、消えちゃう・・・」

『待つて・・・』

孝之は、強引にあたしの体から飛び出した。

一瞬、あたしの目の前が真っ白になってから、じんわりと感覚が戻って来るのが分かる。

自由になった視界に、あたしより一回り大きい孝之の背中が見える。孝之は消えていく男性に駆け寄ると、申し訳なさそうに言った。

「ごめん。俺の彼女が紛らわしいマネして。こういうバカ女だから、アレは止めた方がいい。もっとマシなのいくらでもあるから、今回の事は許してくれないかな。」

は！？

ドサクサ紛れに、何か、失礼な事言わなかった？

悪口に敏感なあたしの耳が、ピクつと反応する。

でも、彼が、あたしのことを迷いなく「彼女」と呼んだ事には、ちよつと感動した。

孝之の言葉を聞き終わると、男性は目を伏せて俯いたまま、スウつと掻き消すようにいなくなった。

後には、コーヒークップの破片が散らばる無残に破壊された店内に、あたしと孝之だけが残った。

もちろん、そこに床に伸びてる執事はカウントしない。

嵐が去った後のような静けさが、再び店内に戻ってきた。

「行っちゃったよ、あの人。お前に好かれてたと思ってたらしい。俺が現われたから諦めたみたいだ。まあ、その前に男がいるって分かって、お前に興味なくなったみたい」

可笑しそうにクスクス笑いながら、孝之はこつちを悪戯っぽく見下ろした。

「・・・どーゆー意味？男がいちゃ、いけないの？」

「あの人、お前が彼氏いない歴35年の非モテ処女だと思ってたみたいだ。女の子はバージンじゃなきゃイヤなんだってさ。」

「何、その偏見！？人を使い古しみたいに！ってか、非モテ処女だと思ってたってどーゆー事ですか！？」

使い古しと思われても、35年未使用だと思われても腹が立つ。

結局、あたしが彼に対して思った事を、彼もあたしに対して思ってたって事か。

お互い様とは言え、あの男にそう思われたという事実は受け入れが

たい。

悶々としているあたしの頭を、孝之の手がポン！と叩いた。

「・・・何？」

「俺の事、呼んでくれてありがと。クリスマス以来だな」

彼の琥珀色の瞳が優しく細められて、ニツコリ笑う。

完璧に美しいその笑顔を見ていると、この男が実は口が悪くて、執念深く、人の揚足を取る鬱陶しい性格をしている事をつい忘れてしまうから不思議だ。

無意識に赤くなってる顔を、あたしは彼に気付かれないように慌てて横を向いた。

「・・・そーだよ。あのクリスマスの夜から、あたし、何度も電話したんだから。でも、繋がらなかった。」

「ゴメン。繋がる事は稀だよ。だって俺・・・」

「・・・いいよ、言わなくて。もう知ってる。」

・・・死んでるから。

その言葉を彼の口から言わせたくなくて、あたしは敢えて遮った。

彼は困った顔で少し笑って、頭を掻く。

悪戯がバレた子供みたいにな照れ笑いがかわいい。

「知ってるなら話は早いな。まあ、そういう事。でも、普通、見えないんだけどな。姿が見えて、体に触れて、エッチまでできるのは恵理が初めてだ。お前がそういう体質なんじゃない？」

「・・・執事さんにも言われた。あたしって、リアルに見える体質なんだって。」

「さっきの男の人だつて、普通、あんな事できないよ。お前の「見える」能力が、霊を強化しちゃうんだよ、きつと」

「・・・それって、あたしが相手だったから、更に攻撃力がアップしたって事？」

つまり、無意識に敵に塩を送つてたという事か。

冗談じゃない！

今後こんな事があつたらどうする！？

ただでさえ、死んでる人なのか、生きてる人なのか区別がつかないつて言うのに・・・。

あたしの不安を顔色で感じたのか、孝之がそつとあたしの耳に顔を近づけた。

彼の息が耳にかかつて、あたしの胸がドキンと鳴る。

「その時は、また呼べよ。俺が守つてやる」

「・・・!!」

甘いセクシーな孝之の低音ボイスが、乙女キラーな台詞を奏でた。ドキドキに胸が痛くて、あたしは思わず目を瞑る。

当然、来るであろう彼からのキスを待ちながら・・・。

しばしの沈黙の後。

期待していたシチュエーションになかなかならず、あたしは業を煮やして薄目を開けた。

「・・・あれ？孝之？孝之、どこ！？」

いない！？

さつきまで、確かにあたしの横にいた孝之の姿が忽然と消えていた。また一人にされてしまった喪失感に、あたしはヘナヘナと座り込む。

この一連の騒動は、夢だったのかな？

いや、そんな筈はない。

この破壊された店内が、ここで何があつたかをリアルに物語っている。

あたしは、彼に逢つたら言おうと思っていた事が、また言えずに終わってしまった事を思い出した。

まだ、怒ってる？

ごめんね。

あたしもやっぱ好きだよ。

たとえあなたが、顔に似合わずネチっこくて、頑固オヤジだとしても……。

「孝之、来てくれてありがと……。」

あたしは天井を見上げて、そう呟いた。

時は流れ、今日は二月十四日。

世間はバレンタインデーだ。

今まで全く売れる気配がなかったワゴンの中のチョコレートは、雰囲気呑まれた浮いたか瓢箪どもによって、どんどん姿を消していく。

この2、3日で激忙しくなってきたあたし達には、この盛況ぶりは嬉しいような悲しいような心境だ。

閑古鳥の啼くワゴンを挟んで立ち話していた時も辛かったけど、客が休む間もなくやってくる今もやっぱり辛い。

働くっていずれにしても大変だ。

ばーばー文句を垂れ流す裕香ちゃんをなだめながら、あたし達は最終日のチョコ販売に明け暮れた。

殺人的に忙しかった夕方を二人でなんとか乗り切り、客足も途絶えた頃、あたし達は揃って溜息をついた。

会社帰りの男性が多いこの時間帯を乗り越えれば、もう後は楽になる。

2週間続いたこのバイトは今日が最終日。

それも後、一時間で終了だ。

もう、このワゴンの前で裕香ちゃんと世間話する事はないだろう。

このお気楽女子大生ともお別れかと思うと、少し寂しくなったが、彼女にも学業がある筈だ。

このバイト中、彼女が一度も大学に行っていないのを、あたしは密かに心配してはいた。

「これで松本さんとお話するのも最後ですね。結構、楽しかったです。今までありがとうございました」

底の見えるようになったワゴンの向こうから、突然、裕香ちゃんが泣かせる事を言ってきた、あたしはギョっとする。

今まで、「イマドキの女子」だと思ってた裕香ちゃんが別れの際にこんな常識人ばい挨拶をするとは思ってなかったからだ。

失礼な話だけ。

「あ、いや、こちらこそ。裕香ちゃんのお陰で楽しかった。これで終わっちゃうのは寂しいけど、勉強頑張ってたね」

あたしは慌てて姿勢を正して、彼女に向き合つとペコつと一礼した。何だかんだ言っても、この二週間、彼女の明るさと止む事のないお喋りで随分助けられたのだ。

あたしは改めて、彼女の顔を見た。

丸い顔つきにポニーテール。

大きなクリつとした目に寒さで赤くなってるホッペ。

無邪気な子供っぽい容貌が、今までの毒舌を許してしまっていたのだ。

彼女が「占い喫茶」で彼氏はどうやってたかできますか、と聞いていた事を唐突に思い出した。

こんなにかわいいのに、彼氏がないのは不思議なくらいだ。

「あ、松本さん、最後のお客様ですよ・・・あ！」

ワゴンの向こうの裕香ちゃんが突然、嬉しそうに声を上げた。声に釣られて、あたしもその方向に顔を動かして、思わず硬直する。

帰路につく人の波から、少し離れてゆつくりとこちらに歩いてくる一団。

そのメンバーには、確かに見覚えがあった。

一人はあたしを散々驚かせておいたクセに、処女じゃなかったという理由で勝手に幻滅してくれたあの地味な中年男性。

最後に見た時と同じように、営業マン風ベージュのコートに身を包んで、立てた襟で顔を隠している。

もう一人はスラリとした長身のイケメン執事。

今日はいつもの執事スタイルではなく、オールバックの髪を下ろして眼鏡をかけている。

黒いロングコートに緋色のストールをフワリと巻いた姿は、ファッション雑誌のモデルみたいだ。

そして、二人の後から少し遅れてついて来るもう一人の長身男性・
・！

あたしは息が止まりそうになった。

柔らかな天然茶髪を風に絡ませ、首を竦めて歩く、姿勢の悪いその姿。

せつかくのモデル体型も、猫背のせいで台無しだ。

いつもの黒いパーカーにジーンズが、変わり映えしなくて可哀相なくらい。

でも、その全てが懐かしくて愛しい、あたしの彼氏。

「孝之！？」

あたしが驚きであんぐり口を開けている間に、三人はワゴンまでゆつくり近付いてきた。

これがあたしの『見える』能力なのか、この中の二人が死んでいる

なんて信じられない普通さだ。

英国紳士のような雰囲気執事さんが、まず、あたし達に会釈した。上品で奥ゆかしいその微笑は、先日、吐血しながら床に転がっていた人と同一人物だとは思えない。

「お久しぶりです。先日はどうもお世話になりました。今日は、この男性諸君の依頼がありまして、同行してきてます」

「はあ、執事さん、二人と仲良くなっただんですか？」

あんな目に遭ったのに！？

彼が思い出さないように、あたしは言葉を濁した。

執事さんは、穏やかな表情であたしを見ろして言った。

「普通に『見える』体質のあなたには分かり難いかもかもしれませんが、彼らに見える人間に会うのが嬉しいんですよ。存在を認めてもらった事になりますからね。僕も、そっち側の人間として、彼らの思いを遂げる力になりたいんですよ。勿論、後日、請求は致しますが」

・・・請求って言った？

途中まで感動すら覚えた彼の言葉の終わりに引つ掛かるモノを感じて、あたしは眉を寄せた。

怪訝そうなたたしの顔を見て、彼は爽やかに笑う。

いや、笑うトコじゃないでしょ！？

「僕はね、拝み屋は拝み屋なんですが、専門は降霊なんです。非常に憑依され易い体質でして、御被いしようとしても、大抵、返り討ちに遭ってしまふんですよ。先日も見苦しいトコお見せしちゃって、恥ずかしい限りです。でも、それならその体質を生かそうと始めたのが、あのカフェなんですよ。占いもしつつ、レギュラーイ

ベントとして、これから毎月恒例の降霊会を開催していく予定なんです」

「・・・あの、それダジャレですか？」

背筋に寒気を感じながら、あたしは執事さんを冷ややかに眺める。面白いでしょ？と一人で手を叩いて笑っている彼を誰も止めなかった。

「で、あなたにお願いがあるんですが、ここのバイト、今日で終わりますよね？」

「・・・はあ。そうですね」

「良かったら、僕のカフェでアシスタント兼ウェイトレスとして働きますか？あなたみたいに靈感が強くて、面白い人を探してたトコなんですよ。もし次の職場がまだ決まっていないうなら、是非にお願いします」

執事さんは白い手をスッとあたしの前に差し出した。

突然の展開にあたしはポカンとして彼の顔を見つめる。

嬉しいというより、明日からまた失業する事をすっかり忘れていた。その申し出は確かにありがたい。

でも、そんなでいいのか、あたしの人生???

キャリア志向のこのあたしが、占いカフェのメイドとか有り得ないし！

「どうです？」

「申し訳ないですけど・・・あたし・・・不安定過ぎる業界はちょっと・・・」

どもりながら言葉を濁していくあたしを見て、執事さんはコートのポケットから折り畳まれた薄い紙をスッと取り出した。

俯いてるあたしの前で、その紙をバサバサ開いて見せる。

「・・・あの、これ？」

「店の修復工事の見積もり書です。破損したカップやグラスなども込みでざっと30万円！こちらに就職していただけなら、これを請求するのは止めますが、どっちがいいですか？」

大天使のような悪魔は、爽やかに笑った。

呆気に取られたあたしは、慌てて紙に目を走らせる。

うわあああ！ホントに30万円請求されてる！

でも、何であたしが払うんですか？

やったのは孝之なのに？？？

「いいじゃないですかあ！松本さんにピッタリですよ。どーせ、仕事なんか見つかる訳ないですって。」

もう、何でもやっちゃいましょう！」

裕香ちゃんが横から囁し立てる。

後ろでクスクスと苦笑している孝之をあたしは睨みつけた。

確かにコイツの破壊行為だったけど、支払能力は皆無だ。

という事は、あたしが払うの、やっぱり??

「・・・今、こんなにお金ないんですけど」

「では、商談成立、ですね？」

「・・・はあ、まあ、宜しく願います・・・？」

この瞬間あたしのボスとなった執事は、まだ納得できずに渋い顔をしているあたしの手をグッと握りしめた。

あたしと執事さんが握手を交わすのを見て、裕香ちゃんが手を叩いて喜んだ。

「良かったじゃないですかあ！これでしばらく食い繋げますね」

「うん、ありがと！って、何、その低レベルな幸せ！？取り合えず、お世話になりますけど、いつまでいるかは分かりませんからね！？でも、社会保険だけは入れて下さいよ！」

「それでいいですよ。でも、僕はあなたとは長い付き合いになる気がしてるんですけどねえ。・・・さて、裕香ちゃん？」

白い手をヒラヒラ振ってウィンクしてから、彼はキャッキヤとはしゃいでいる裕香ちゃんに向き直った。

冷たい風に長い前髪がサラサラと揺れて、物憂げな雰囲気は確かに霊能力者っぽく見える。

切れ長の黒い瞳を伏せて、彼はジッと裕香ちゃんを見下ろした。

急に真面目な顔になった執事さんに、正面から見つめられた裕香ちゃんは、悪戯を隠していた子供みたいにソワソワと落ち着きなく視線を泳がせた。

その二人の様子をあたしは首を左右に振りながら、バカみたいに見比べていた。

・・・執事さんが、このお気楽女子大生に何の用だ？？
まさか、本当に交際申し込むつもりじゃないでしょ！？
つてか、裕香ちゃんのこのモジモジした態度は何！？

「僕は裕香ちゃんに言わなきゃならない事があるんですよ。彼女は、

もう分かつてるとは思いますが・・・」

「なっ、何それ！？二人はもうデキちゃってるの！？」

途端、コーン！と音がして、あたしの頭にチヨコの箱が命中した。箱の角が頭に刺さって、あたしは思わず後頭部を抱えて座り込む。振り返ると、眉間に眉を寄せてイヤそ～な顔した孝之が腕組みして立っていた。

「何すんのよ！痛いじゃないの、バカ！」

「・・・お前なあ、オバサン丸出しなんだよ。その下世話な表現、何とかなんねえのか？そんなだから、男いない歴35年に見られんだよ」

「ほっというてよ！あんだっていい年して、何、そのヤンキー口調？執事さん！いつの間にこの女子大生とやっちゃったんですか！？」

芸能レポーターみたいに食いついていくあたしを、執事さんは苦笑して見下ろした。

「残念ながら、やつちゃった訳ではありません。あなたは本当に面白い人ですね。『見える』能力もここまでくると大したものだ。この裕香ちゃんが生きてる人間ではない事に、全然、気付かないんですか？」

へっ！？

生きてない？

あたしはその言葉にギョっとして、バイトの同僚の顔を凝視する。悪戯っぽい大きな瞳をクルクルさせて、裕香ちゃんは肩を竦めるとぺろっと舌を出した。

「松本さんって、ホントに天然ですよ〜。女子大生なのに大学行かずに毎日ここに来てるし、変だと思わなかったんですかあ？」
「そ、そりゃ、心配はしてたけど。あたしはてつきりテストが終わって単位が取れたのかと・・・」

シドロモドロに言い訳をするあたしを見て、裕香ちゃんはアハハと口を開けて笑った。

「あたし、高校で死んじゃったから、大学行ってないです。花の女子高生、享年１７歳ですよ。彼氏は募集中でした！」

「きよ、享年って・・・」

そんな合コンの自己紹介みたいに言われたって・・・。
どこにツツ込めばいいの、その自虐的プロフィール！

もう沈黙するしかないあたしを見て、執事さんが笑いながらフオロロに入る。

「あなたに彼らが見えるように、彼らも『見える』人間は分かるんです。裕香ちゃんや、あなたの彼氏、そして通りすがりのこの彼までここに集まってしまったのは、ある意味、あなたが呼んだからなんですよ」

「そうそう！言ったじゃないですかあ！松本さんの周りって、なんか、温かくて明るいカンジがするんですよ。あたし達って、灯りに集まる蛾みたいに、そういう人のところに飛んで行っちゃうんです」

あたしに集まるのは非モテ男だけじゃなくて、幽霊もってコト！？
集まって来られても嬉しいメンバーでないことは間違いない。
どうせなら、年収一千万以上の独身男性が集まる灯りになりたいものだ。

「・・・そーなの？孝之。だから、あんたも来てくれたの？」

チラリと背後にいる彼を振り返って、あたしは聞いてみた。
肩を竦めて、孝之は苦笑する。

「そこは愛の力だと思っとけよ」

「・・・バカ」

微妙な空気が流れた場をブチ壊すように、裕香ちゃんが大きく伸び
をして空に向かって怒鳴った。

「あーあ！つまんないの！あたしだけいい事何にもないんだもん！
執事さん、あたし成仏なんてしませんからねー！」

「あなたの心残りは彼氏でしょう？それなら成仏できるかもしれま
せんよ？」

執事さんは器用にウィンクして、ワゴンの後ろで突っ立っていたあ
の男に向かってサッと手を差し伸べた。

くたびれた会社員のようなコートに身を包んだオタク男は、執事さ
んに呼ばれるまま、真っ直ぐにこちらに向かってくる。

人を使い古しの年増女みたいに言ったクセに、まだ未練がましくや
って来るとはいいい度胸だ。

今度こそこっちからお断りしてやろうと、胸を張って待ち構えたあ
たしの横を、彼はスッと素通りした。

そして、裕香ちゃんの前でピタリと停まると、ポケットから見慣れ
たチョコレートの箱を取り出した。

それは紛れもなく、バイト初日にあたしが無理矢理買わせたあのチ
ョコだった！

彼は真面目な顔で裕香ちゃんを見つめると、その手を取って、グッとチヨコの箱を握らせた。

パッと見は何の特徴もない中年男性だと思ったのが、こうやって間近で見ると、それほど年はいってなさそうだ。

細い小さな目に、スッと通った小さい鼻。

意外と形のいい唇はキリッとしていて、白露戦争時代の軍人みたいだ。

確かに、地味で目立たないけど、よく見りゃ凛々しいお顔立ちをしている。

かわいいのに年齢詐称の為、意外と経験値の低かった裕香ちゃんは、真剣な表情で無言の求愛をされて、ポワンと顔を赤らめた。

「あ、あたしでいいんですかぁ・・・？」

チヨコの箱を抱き締めて、裕香ちゃんは困ったような、嬉しいような乙女の表情で、執事さんとあたしに助けを求めた。

ここは微妙に悔しいけど、姉御分としては後押ししてやらねばなるまい。

こいつも、裕香ちゃんがバージンなのを見越して求愛してくるとは、オタクのクセしてなかなか食えないヤツだ。

初体験にキョドってる裕香ちゃんに、執事さんが笑って応えた。

「裕香ちゃんは、以前、僕にどーやったら彼氏ができますかって聞きましたよね？」

「・・・うん」

「それは妥協です。人生、何事も諦めが肝心！妥協すれば、おのずと自分の丈に合った幸せがやって来るものです。それができない人は、仕事も男もいない状態で35歳になっちゃうんですよ。あなた

を求めてくれる人と一緒に逝くのが一番だと僕は思いますけど?」

「そーよ!女は思われてこそ、ナンボよ!」

・・・って、オイ!

何か、今、人の悪口言わなかった!?

聞き捨てならない言葉に、あたしの耳がビクッと反応した。

隣で聞いていた孝之はブッと噴き出し、ゲタゲタ笑い転げる。

裕香ちゃんは恥ずかしそうに彼を見上げて、花が綻ぶ様にニツコリと笑った。

そして、地味だけど誠実そうな彼にそっと寄り添うと、彼の腕は優しく裕香ちゃんを抱き締めた。

二人は一つに重なって、だんだん影が薄くなっていく。

「・・・ありがと・・・松本さん・・・」

彼の腕の隙間から、悪戯っぽく笑う裕香ちゃんの目がウィンクして、それから二人の姿は完全に見えなくなった。

11（後書き）

次回最終回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925z/>

霊幻彼氏

2012年1月9日01時47分発行